みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.031; 序文

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 良男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/1460

序　　文

杉本良男

本論集は，1997年4月から3年間にわたって行われた国立民族学博物館の共同研究「福音と文明化の人類学的研究」（代表者 杉本良男）の成果報告書である。

この共同研究は，人類学がおもに研究対象としてきた地域において，キリスト教ミッションを媒介にした「文明化」の過程がどのように進展し，どのような帰結をもたらしているのかについて，さまざまな事例から人類学的に比較検討しようとする目的で構想された。そのため，本研究では，当該主題に精通した専門研究者を集めて，それぞれの研究成果を披瀝していただくとともに，活発な討論を通して，諸事例を比較検討しつつ相互の認識を深める方法をとった。また，基本的には現在学としてのスタンスをもつが，輓近の人類学における歴史への傾倒をうけて，現在的な歴史，歴史的産物としての現在，という意味において，歴史事象をも研究対象としている。

本論集では，従前の人類学が対象としてきた未開社会あるいは非キリスト教世界だけでなく，西欧などキリスト教世界そのものをも対象としてとりあげている。両者をつなぐ鍵概念は，フランス革命期以降の全般的な「文明化（civilization）」の進行である。ここで，「文明化」を鍵概念とするのは，ひとつには，「野蛮」を「文明」へと引き上げるという「普遍化志向」の動態性への関心からくるものであるとともに（大塚 2002: 35），ウェーバーのひそみにならって，人類史の流れを大きく全般的な合理化の過程，あるいは「文明化」の進展の過程ととらえて，現代社会における諸問題を根底的に考え直すための一助としたい意図があるからである（cf. 杉本 2002: 16-18, 328）。

本研究は，人類学者がとかく「文明対未開」の二項対立図式をもとに，文明が外からやってきて伝統文化を根底から破壊した，との一方的な被虐史観に立脚し，受容する側にも取捨選択や自由な改変があるのだというような，「したたか」さを強調する単純な主体性論にはくみしない。むしろ，西欧キリスト教世界においても，「文明化」が同時に進行していたことを，あらためて考え直すべきだと考えている。したがって，ここでは西欧キリスト教世界を歴史化，相対化しつつ，等身大のものとしてみること，そして，西欧キリスト教世界と伝統社会文化とを連続性の相のもとに再検討すること，が当面の目標である。

このような認識に至った背景には，たとえば，イギリス植民地時代以降の南アジア世界を人類学的に考察する過程で，当時のイギリス社会あるいはヨーロッパ社会自体がかかえていた問題を，インドに反転させてこれと関わっていたことが明らかになってきた事情がある。ストッキングが述べているように，19世紀イギリス社会の最大の関心事

は，家族（親族）と宗教（信仰）の問題であった（Stocking 1987）。このことが反転してインドの社会·宗教と対面したときのイギリス側のさまざまな対応にその問題意識が反映されていたことは，最近とみに注目されている点である。

こうした西欧の反転像として植民地を位置づけながら，両者を連続した相のもとでとらえようとする視点は，オリエンタリズム批判論，ポスト·コロニアル論などでの理論的な蓄積がある（cf. Breckenridge & van der Veer 1994）。しかし，それを実例に則して，実証的に検討しようとした例はまだまだ多くない。もちろん，ここで「実証的」とはいっても，キリスト教的な，被造物に神の意志を認めるたぐいの前提にたった「本質主義」に立つわけではないし，逆にキリスト教的前提に無関心な本質主義批判にくみするわけでもないことをお断りしておきたい。

それとともに，この合理化あるいは文明化の進展自体，あるいはわれわれのさまざまな概念把握自体にひそむ，いわば「概念のキリスト教起源性」とでもいうべき問題群もまた、重要な主題となる。これについては，人類学における宗教とくに「儀礼」への偏愛が，キリスト教世界におけるカトリシズムとプロテスタンティズムとの対立を背景にしていること，また19世紀イギリスでは，「儀礼主義」と「反儀礼主義」との対立が起り，キリスト教会を二分する論争になったこと，それがインドやスリランカに反転して，カトリック解放令や儀礼の禁止などにつながったことなどをすでに指摘したことがある（杉本 2001）。

ところで，本研究において「福音と文明化」というタイトルを掲げている理由について，いわば「名称問題」への釈明が必要と考えられる。本タイトルのアイディアの根源は，ヒーベルトの書中に現れた次の一節であった。

> 近代ミッション活動は，西欧の植民地と技術が拡大していった時代に生まれ，また，西欧のミッションは，福音（the gospel）を西欧文明（化）（Western civilization）と同じと考えることが多かった（Hiebert 1985: 9）。

ここでの「福音」と「文明（化）」という２つの鍵概念には，多義性なり多訳性？がつきまとい，それ自体再検討すべき意味をもっている。それは，日本語の「福音」の多義性および歴史性，つまり gospel と（から）evangel（へ），あるいは civilazation の多訳性つまり「文明」と「文明化」などが結果的に本研究のめざす方向を示すてがかりとなっているからである。とくに，近代という文脈における「福音」と「文明（化）」の概念に隠然としてみられるプロテスタント的色彩は，とりわけ19世紀以降のミッションそのものの傾向にとって決定的な意義をもっている。

このことは，概念の「定義」に関わることがらではなく，むしろ概念の歴史性に深い

関わりがある。この「概念の歴史性」の問題もまた，本研究の重要な通奏低音をなしている。ここには，われわれが日常的に，あるいは学問的にも，さまざまな歴史的背景をもった諸概念を，あたかも普遍的な概念であるかのように定義し，運用していることを批判的に再検討しようとする意図がある。とりわけ本研究は，キリスト教起源の諸概念を，相対化しようとする立場に立っていることはいうまでもない。

ここで，「文明化」の概念を導入することにより，問題の核心は，フランス革命以後のキリスト教ミッションをおそった大変動と，それに呼応した各地の社会文化との相関関係におかれることになる。さらには，フランス革命に先行するラテン·アメリカ世界のキリスト教化や，イスラーム世界との相関関係なども視野に入れた上で，19世紀以降の「文明化」の進行が，人類史的意義をもつのかどうかについて議論することが最終的な目標となる。

フランス革命期以降のいわゆる近代史は，キリスト教史，ミッション史においても，大きな変動を経験した時代である。キリスト教とくにミッションが経験したもっとも大きな変動は，諸国家の上位に屹立して，強力に「普遍主義」を標榜するローマ教会の威光のもとにあったイエズス会型のミッションから，カトリックさえもが国民国家理念の軍門にくだったのちの，弱者の救済·保護をうたうプロテスタント的近代ミッションへの転換である。こうした，世界の人類史的なプロテスタント化，合理化の趨勢は，1965-6年の第2ヴァティカン公会議における現地化への流れとあいまって，カトリックが普遍主義の旗そのものもおろさなければならない事態をも招いている。

このような観点からの研究の必要性は，とくに日本人のそれも異教徒·キリスト教徒をとわず，研究者がこの概念のキリスト教起源に疎い事情があるからである。それは，異教徒はキリスト教に無知あるいはキリスト教を無視ないし嫌悪（あるいは憎悪）し，いっぽうキリスト教徒は，みずからの信者性を隠蔽しようとする性癖があるという，特殊な事情が働いているからだと思われる。日本におけるキリスト教への無関心については，たとえば，松本道介が，ヘルムート·プレスナーの『ドイツロマン主義とナチズム——遅れてきた国民』への訳者による「解題」で，次のように述べている。

> プレスナーの論述の根底をなしているのは，キリスト教と哲学の関わりについての考察である。キリスト教に基盤をおいた精神史という意味では，マックス·ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』にかようものを感じさせるが，読んでいて私は，かつてのヨーロッパにおけるキリスト教勢力の強さについて，つまり，“彼岸”の事柄がどれだけ現世を支配していたかについて，これまで無知に等しかったことを思い知らされた。
>
> また私の無知を棚上げにしていえば，日本における西洋学の研究にいかにキリスト教史の研究が不足しているかも痛感させられた。たとえばルターの宗教改革についてはかなりくわしく紹介されていても，アウグスブルクの宗教和議以降のドイツにおける領主主導型の宗教

のありようについて，また近世においてキリスト教勢力が後退していく過程での“世俗化”の実態について，どれだけのことが知られているだろうか（プレスナー 1995: 349-50）。

松本の慨嘆は，とくにドイツ哲学史·精神史の分野に向けられたものである。しかしながら，日本のとくに戦前のアカデミズムにおいて，ドイツ哲学の影響は決定的なものがある。その啓蒙主義·教養主義の伝統は，日本のエリート層を輩出した旧制高校の精神的支柱であった。日本のドイツ哲学受容に，キリスト教の影響への関心が欠落していたとすれば，それは日本のアカデミズム全体をおおう無知だといっても過言ではない。もちろん，戦後のアカデミズムは，日本の植民地状況を反映して，アメリカ主導の性格が強く，西欧起源の思想がうすめられ，単純化されながら受容される傾向があるので，問題はさらに複雑である。

こうした事情を勘案すれば，本論集において，各地の事例をとりあげながら実証的に検証し，キリスト教による「文明化」のさまざまな側面およびその影響を考察しようとする試みの意図が理解されるであろう。とくにこの分野の研究は日本ではまだまだ未開拓の部類に属する上に，本論集に寄稿された論者のあいだの問題意識の共有も不十分であるが，この時点であえて公刊する意義があるものと考えている。

本書の全体は，基本的に地域性，時代性を考慮しながら，5部構成をとっている。

キリスト教ミッションを人類学的に扱うさいには，非西欧世界におけるキリスト教受容が焦点となるが，初めの杉本(良)論文で，「福音」，「ミッション」，「ネーション」，「文明（化)」など，これまであまり人類学的に議論されてこなかった諸概念を整理しながら，キリスト教ミッションについての人類学的考察の結構を示している。とくに，キリスト教による文明化のもたらした逆説的な帰結をいかに評価するかが問題の焦点であることが示される。

第Ⅰ部では，ヨーロッパ世界の，イギリスと東欧を扱った2論文をおさめている。

山中論文は，大英帝国時代のイギリスにおけるプロテスタント諸派の海外ミッションを，イギリス国内の社会·宗教動向のなかで論じている。こうした19世紀のイギリス社会の動向を背景に海外ミッションをとらえなおす試みは，とくに人類学が伝統的に調査対象としてきた地域のミッションについて考えるさいの重要な資料を提供するものである。とくに，受容側でとかく一枚岩的にとらえられがちなミッション側のさまざまな政治的社会的背景を考察することは，ミッション研究に不可欠の視点であり，また問題を，送り出し側と受容側との連続性の相のもとにとらえなおそうとする本研究にとっても，きわめて重要な論点を提供している。ただ，ミッションを送り出した側の論理についての研究は，とくにローマ·カトリック教会，プロテスタント諸派については，まだまだ研究者の質量ともにうすく，今後の研究の進展がまたれるところである。

一方，新免論文は，ソ連圏の社会主義体制崩壊後，ロシア，旧東欧などで，それまで抑圧されていた民族，宗教などの集団的活動が自由化された状況を背景に，ウクライナとルーマニアにおいて顕在化した，ギリシア・カトリック教会とロシア・ルーマニア正教会とのあいだの対立を扱っている。ただでさえキリスト教の実態に疎い日本では，東方教会についてまったく知られていないといってよいが，本論文によって，東方教会内部にさまざまな対立があり，それが社会主義体制崩壊後のこの地域の宗教・政治状況をいちじるしく複雑化していることがうかがわれる。そこでは，単なる宗教「復興」ではなく，現在の複雑な世界情勢，宗教状況を背景にした新たな展開が生まれていることがわかる。その意味でも，本論文はこれらの地域における地道なキリスト教研究が必要であることを示唆している。

第Ⅱ部は，クリストーバル・コロン（コロンブス）の活動以後，とくにキリスト教が早くまた深く浸透したラテン・アメリカ世界におけるミッション活動とその意義について，歴史的視点から考察した2論文から成っている。

齋藤論文は，植民地時代のスペイン領ペルーにおけるイエズス会宣教師の言語政策をとりあげ，先住民社会への影響について実証的に跡づけている。キリスト教ミッションの活動において，言語の問題は，基本的に主のロゴスの伝達という観点から，もっとも根源的な意義をもっている。その意味で，多くの歴史資料を駆使して，ミッションの論理と現地の反応を詳細に跡づけた本論文の価値はきわめて高い。

原論文もやはり16世紀以降の南アメリカにおける伝道村（レドゥクシオン）をめぐる，ミッションと村人たちとの相関関係について述べている。さらには，18世紀半ばにイエズス会が追放されたあとの主にヨーロッパでの評価あるいはディスコースについて述べる。

以上2論文を通して，キリスト教による「文明化」が比較的早く進展したラテン・アメリカ世界の特殊性を知るとともに，19世紀以降のキリスト教世界自体の大きな変貌が，この地域でどのように展開されたのかについての，新たな大問題に行き当たることになる。それは，その他の地域での「文明化」の進展といかに違い，またいかに類似しているのかを検討するための不可欠の材料となるはずである。

第Ⅲ部では，インド洋諸国の，スリランカとレユニオンにおけるミッションについて取り扱っている。

川島論文は，インド洋の中央に浮かぶ島国スリランカのキリスト教とナショナリズムとの関係について考察したものである。ここではとくに，植民地支配下のスリランカにおいて，宗教ナショナリズムが昂揚する過程で，宗教的なバウンダリーが形成され実体化される過程について歴史的に跡づけられている。スリランカのナショナリズムとくに仏教ナショナリズムは，キリスト教の直接間接の影響を強く受け，また改革仏教は，

オベーセーカラによって「プロテスタント仏教」と名づけられたように，きわめて「文明化」，「合理化」されている点で，本論集の趣旨に照らして重要な事例を提供している。

杉本(星)論文は，インド洋西部にあるフランス海外県，レユニオンにおけるキリスト教について，とくにマリア信仰を軸にしてその受容，および現在の複雑な存在形態について実証的に考察したものである。マリア信仰は，プロテスタンティズムからは大いに批判の対象となるが，キリスト教布教，土着化の過程ではむしろ決定的な意義をもってきた経緯がある。本論文は，キリスト教の展開にとってのマリア信仰の重要性を指摘するだけでなく，各地域におけるマリア信仰を通じたキリスト教受容についての比較研究を促している。

第Ⅳ部は，アフリカにおけるミッションと現地社会について，上記のレユニオンからミッションが派遣されて定礎されたタンザニアと，西アフリカのガーナについての研究をおさめている。

小泉論文は，東アフリカ，タンザニアにおける「信仰覚醒運動」をとりあげて，その展開過程と，現地社会に及ぼした影響について，やはり実証的に考察している。この運動は，1930年代のウガンダに起ったが，50～60年代をへて70年代以降，ペンテコステ派の影響のもとで，変質していった経緯がある。さらに，キリスト教的信仰の純化をめざした運動の帰結は，呪術的，異教的な信仰を強化したという，まことに逆説的な結果を招いたと指摘されている。この信仰の純化にともなう呪術化の信仰というパラドックスは，ほかの地域でもかたちをかえて起っている。その意味でも，本論文は重要な比較事例を提供している。

渡辺論文は，メソジスト宣教団が，ゴールドコースト（現ガーナ）において，はじめ農園事業や奴隷制度廃止に向けた試みなど，直接現地社会に影響を与えた活動からしだいに手を引き，19世紀半ばに「信仰の塊」という純粋に宗教的な営みへとその活動範囲を縮小していった過程を追い，その結果，宣教団が植民地統治に大きな影響力をもたなかったことを指摘している。ここでの，ミッションの活動が「文明化」から宗教の布教へと集約されたために，影響力を失ったという指摘は，まことに，ミッションと植民地支配との関係をいいえて妙といわなければならない。

第Ⅴ部では，太平洋諸国のフィジー，ヴァヌアツ，フィリピンの事例を扱っている。

橋本論文は，フィジーにおける白人宣教師と彼らによって育てられた島嶼人宣教師とのあいだの相違と，改宗を促すそれぞれの戦術をまず検討し，さらに宣教学における「文脈化理論」を批判的に検討したのち，フィジーにおける宣教，フィジー人宣教師によるほかの島々での布教，現在までのキリスト教会のあり方などを，文脈化理論の再検討を通して明らかにする試みである。ここでは，最後に文脈化理論への批判として，現

地における文脈化への視点が欠如していることが指摘されるが，これまた人類学的ミッション研究にとってきわめて重要な論点を提供している。

白川論文は，20世紀半ば以降に，メラネシア，ヴァヌアツで活動を活発化させた新興教派の動向，とくに，そのなかでの長老派教会の福音伝道運動について事例研究を行っている。興味深いのは，ここでも，キリスト教浄化の運動が，かえって邪術の偏在を招くに至るという逆説的な動きである。このような事態は，さまざまな地域でみられるが，このことは，呪術的信仰そのものが，何らかの意味で，いわゆる大宗教との関係性のなかで，根本的に変貌したこと，あるいは，呪術的信仰自体が，大宗教の存在を前提としている，というような，呪術と宗教との関係の根底的な再考を迫るべき問題のひろがりがあることも示唆している。

最後の寺田論文は，フィリピンにおける日本のキリスト教の活動を扱ったもので，論集は日本に立ち戻ってゆるやかに円環を閉じることになる。ここでは，第二次世界大戦中に，日本占領下のフィリピンに派遣されたカトリック婦人挺身隊（Catholic Women's Religious Corps（CWRC））の活動を扱っている。この部隊は，大日本帝国によって，カトリック教徒が多数を占めるフィリピンの支配を円滑に行うための宣伝部隊として派遣され，日本語教育などに大きな役割を果たした。こうした，戦時下の植民地における日本キリスト教の活動についての研究は，ほとんど未開拓の分野に属するので，本研究の意義はきわめて高いものがある。

このように，本論集では，各論文で扱われている時代も地域もまちまちであるが，編者の意図するキリスト教による文明化のパラドックスについて，いくつかの重要な論点が提出されていることがわかる。いずれも，これまで等閑視されてきた分野に果敢に切り込んだ論考であり，これからの研究の進展の礎石となるべきものである。今後，本論集をきっかけに議論が進めば望外の幸せである。

本論集の刊行にあたって，共同研究員およびオブザーバー参加の研究者各位のご協力に深甚の感謝を申し上げるとともに，編者の怠慢から大幅に刊行が遅れてしまったことをお詫びしたい。また，面倒な編集作業をすべてひきうけていただいた中尾知恵さんに，心よりお礼を申し上げる。

文　献

Breckenridge, Carol A. & Peter van der Veer (eds.)

1994 *Orientalism and the Postcolonial Predicament: Perspectives on South Asia.* Delhi: Oxford University Press.

Hiebert, Paul
1985 *Anthropological Insights for Missionaries.* Grand Rapids, Michigan: Baker Book House.
プレスラー，ヘルムート
1995 『ドイツ・ロマン主義とナチズム——遅れてきた国民』(松本道介訳)，講談社学術文庫。
Scott, David
1999 *Refashioning Futures: Criticism after Postcoloniality.* Princeton: Princeton University Press.
Stocking, George W., Jr
1987 *Victorian Anthropology.* New York: The Free Press.
杉本良男
2001 「儀礼の受難」杉島敬志編『人類学的実践の再構築——ポストコロニアル転回以後』pp.246-270, 世界思想社。
2002 「問題提起——宗教と文明化の二〇世紀」杉本良男編『宗教と文明化』pp.11-31, ドメス出版。

共同研究会「福音と文明化の人類学的研究」(1997-2000)

97.06.28	杉本良男	「問題提起——福音と文明化のパラドックス」
	全　員	「研究打ち合せ」
97.10.25	秀村研二	「教会と教会のあいだ ——韓国社会におけるキリスト教の受容と変容」
	岡田浩樹・五十嵐真子	「コメント」
98.01.10	山中　弘	「ミッションと大英帝国 ——メソディスト派の動向を中心にして」
	橋本和也	「植民地体制下のフィジー・キリスト教」
98.03.14	小泉真理	「福音の追求——タンザニアのキリスト教リバイバル運動」
	菊地滋夫	「ケニヤ海岸地方後背地におけるゆるやかなイスラーム化 ——カウマ社会での調査から」
98.07.03	寺田勇文	「大日本帝国とキリスト教 ——第二次大戦期の日本の対比宣撫工作」
	原　誠	「大日本帝国とキリスト教——インドネシア」
98.10.17	渡辺和仁	「隷属民と宣教師——19世紀中葉のガーナにおける メソジスト宣教団の活動を中心にして」
	海野るみ	「民族・教会・歴史——南アフリカ・グリクワのサバイバル戦略」
98.12.19	白川千尋	「ヴァヌアツにおける呪いと福音」
	川崎一平	「パプアニューギニアにおける NGO とミッション」
99.06.26	川島耕司	「南アジア社会とミッション——スリランカ」
	杉本星子	「南アジア社会とミッション——レユニオン，モーリシャス」
	小林　勝	「南アジア社会とミッション——インド・ケーララ州」
	杉本良男	「南アジア社会とミッション——インド・タミルナードゥ州」

99.07.17	斎藤　晃	「イエズス会のミッションと言語 ——ラテンアメリカの事例より」
	原　毅	「レドゥクシオン以降のグァラニ社会 ——チリグァノ社会を中心に」
00.03.18	藤原久仁子	「マルタにおけるキリスト教の新たな動き」
	佐原徹哉	「ブルガリア・ナショナリズムの形成と東方正教」